



小児がん・白血病支援の1年を振り返る さとうまき 佐藤真紀(事務局長)

09年度も無事に終了し、4月から新しい年度を迎える事が出来ました。一年間のJIM-NETの支援を振り返ってみたいと思います。

イラク国内の治安がよくなり、一般の関心が低くなる中、ガン子ども達は増え続けています。保健省からの薬の供給は10%~50%でNGOの支援も日本以外からはほとんど来なくなりました。



アハマト君(3歳白血病)、オマル君(4歳白血病) ナナカリー病院で 川添圭子撮影

09年度の重点目標

は、①JIM-NETが中心となり日本社会に訴え、少なくとも今までどおりの支援を継続すること。各病院の医師たちから強いリクエストもあり、抗がん剤や、抗生剤などの医薬品の支援は、20%予算を増加することになりました。

そして治療成績を上げるために、信州大学から指摘のあった、②遺伝子解析などの高度技術を導入する準備を始めること。

イラク国内も治安がよくなってきたので、今までのヨルダンのアンマン事務所から、アルビルに拠点を移し、③アルビルのナナカリー病院の支援を強化し、モデル病院として日本から医師や看護師を派遣し、感染症対策などのトレーニングを行い、バグダッドやバスラからも研修員を受け入れられるようにしようということでした。

以下、上記3つの重点目標の達成状況をご報告します。

① 医薬品支援、前年度比20%増!

まず、医薬品支援実績です。バスラとバグダッドの子ども福祉病院がほぼ予算どおり。セントラル病院は前年度比では、143%の増額になりました。これは、同病院がバグダッドの中でも治安が悪い場所にあり、一時は医者も患者も病院に近づくことすらままならない

状況だったのが、治安が良くなり、医療活動が活発化したことが大きいと思われます。逆にモスルは治安が悪化し、病院内のマネージメントもうまく行われず、JIM-NETからの送金を停止せざるを得なかった月もありました。09年度から開始したナナカリーは、製薬メーカーからの現物寄付(セーブイラクチルドレン札幌とJCFが担った)を除くと、100万円ほどになり、当初予算の300万円を下回りました。これは、薬剤在庫管理能力が予想以上に低かったのが様子を見ながらの支援となったためです。

ナナカリーを除く今までかかわってきた4病院の合計金額は、21.9%増となり目標はほぼ達成できました。

②遺伝子解析が始まった

遺伝子解析技術をイラクに導入するため、2009年2月より、モスルのイブン・アシール病院から、リカー医師

■ 医薬品支援実績 (単位=円)	予算	実績(推定値)	昨年度実績	前年比(%)	*2006年	*2009年
バスラ 産科小児科病院	12,000,000	11,948,688	9,480,496	+26	10.3%	0%
バグダッド 子ども福祉病院	12,000,000	12,823,550	11,074,245	+15.6	10.9%	6%
バグダッド セントラル病院	7,200,000	4,194,688	1,677,548	+150	25.6%	3.4%
モスル イブン・アシール病院	7,200,000	5,481,296	6,037,096	-9.2	7.7%	データなし
アルビル ナナカリー病院	3,000,000	5,003,720	0			20%
合計(ナナカリーを除く)	38,400,000	34,448,223	28,268,385	+21.9	**14.0%	4.4%

* 急性リンパ性白血病1か月以内の死亡率(2ページ)

**イブン・アシールとナナカリーを除く

が来日し、JICAの事業で信州大学に留学中です。研究テーマは「イラク国内で発症した小児白血病の分子生物学的特徴についての解析」ですが、イラクから集められた患者の血液サンプルの解析が進んでおり、既に130検体が集まっています。最終的には300検体の解析を行う予定。今のところ、イラクに特徴的な白血病のタイプは見つかっていません。現在は予後因子と関連のある遺伝子を解析し、イラクの医師にフィードバックしており、骨髄移植をやるべきかどうかという治療方針を決定するのに重要な情報となっています。

イラク国内では、骨髄移植を行うことはまだ出来ませんが、ヨルダンなど他国で骨髄移植をするべきかどうかの判断に役立つと思われます。JIM-NETは、リカー先生の留学に関してJICAなどと調整をしてきましたが、今後も現地でのサンプル収集などに協力していきます。

③アルビルに拠点が出来ました！



昨年11月、ついにイラク国内に事務所を構えることが出来ました。場所はアルビルです。ここはクルド自治区内で、今までかかわってきたイラクとは随分様子も違うようです。事務所を持つことで、ローカルスタッフとも頻繁に会うことが出来、アカウンタビリティが高まりました。情報発信も活発にしていきますのでご期待ください。(次頁の川添圭子看護師(写真)のレポートをお読みください。)

初期死亡率が著しく低下！

急性リンパ性白血病(以下ALL)は、イラクでもっとも多い小児がんで、約半数を占めます。10種類以上の抗がん剤等を組み合わせ、2～3年間の化学療法を続けることで、80%以上の子ども達の命を助ける事が出来るといわれています。しかしイラクでは、治療を始めてからの1か月間に、感染症や、出血のために死亡するケースが多いことから、薬の供給とともに、感染症対策などを指導することで、初期死亡率を低下させることを目標に設定。今回、バグダッドとバスラの3病院のデ

ータを集計したところ、3年前に比べ、1か月以内の初期死亡率は、14%～4.4%まで下げる事が出来ました。(前頁の表グレー部分)井下医師(JIM-NET理事)いわく「画期的なこと」。しかし、支援を開始したばかりのアルビルのナナカリー病院の初期死亡率が20%ときわめて高く、モデル病院にするのには、まだまだ先が遠い事もわかりました。9月には、感染症対策トレーニングコースを開設し、バグダッド、バスラの看護師も招聘してトレーニングする予定で川添看護師が頑張っています。



「ガンは治る病気！」

イラク南部のバスラは、がんの発症率が最も高いといわれています。1991年の湾岸戦争では、アメリカ軍による激しい攻撃を受けました。この時使用された劣化ウラン弾の影響で小児がんが増えているといわれています。

かつて栄えた港町も戦争で疲弊して、病院の設備もよくありません。JIM-NETでは、バスラ産科小児科病院に対し、医療支援だけでなく、早



左がザイナブさん

い時期から院内学級など、子どもたちを楽しませる活動や、家族の相談の受け付けや、経済的な支援も行ってきました。

院内学級では、子どもたちが楽しむだけでなく、治療中に学校を休んでも進級できるような取り計らいがなされています。教育省は、30日休んだ子どもに対しては、進級を認めないとしていましたが、JIM-NETスタッフのイブラヒムらの申し入れで、がんの子どもたちの欠席許容日数を60日に引き延ばしました。その結果2009年は、院内学級の生徒全員が進級できました。

最近、院内学級で働いているザイナブさん(18歳)は、子どもたちに絵を教えています。実はこの間まで、彼女も白血病で通院していました。イブラヒムは「先生としてはまだまだです。彼女は、今、高校に行こうと勉強しているので、私が勉強を見てあげています。でも、子どもたちは、彼女の事を見ながら、がんは助かる病気だと思えるようになりました。」と言います。

イブラヒムは、貧しい家庭を訪問して、交通費を支給し、子どもたちがきちんと病院に来れるように働きかけます。08年度支援の延べ人数は、35名だったのが、09年度は85名に増えました。

アルビル、ナナカリー病院報告

かわぞえけいこ

川添圭子(JIM-NET看護師)



4月22日、アルビルへ戻ってきました。
今回は小児点滴シミュレーターという4本の腕と少しの医療資材とともに旅をしました。



シミュレーター

このシミュレーターは模擬血液粉末、模擬血液を循環させるポンプ、血管つきのリアルな腕4本がセットになっていて学生さんが点滴や採血の練習を行うのに使用するのですが、今回はこれで、点滴の固定方法の練習をしようと思っています。

この腕4本をこちらへ持

って帰ってくるのが大変でした。

まず、日本の空港で搭乗手続きをするときに、荷物の超過料金がなくて驚きました。そして、そのままアンマンまで預けっぱなしだったのですが…。

入国の際、荷物がスキャンされて…、何度もスキャンする機械の中を行ったり来たりする腕の入った箱。

チェック担当の係員が「何だ、これは?」というようなジェスチャーをしています。

確かに腕が4本画面に映ったらびっくりすると思います。勿論、箱を開けて、中身チェックへ。ポンプが危ない機器ではないかどうか心配だったようです。そこも、切り抜けて、次は出国。いざ、アルビルへ。

また中身チェックです。同じことの繰り返し。医療資材は麻薬チェックもされました。

そして、搭乗手続きになるわけですが…、やっぱり重すぎて超過料金。

ちなみに、ここで箱を開けられましたが、閉じてはくれないので、仕方なくお金を払ってパッキングしてもらいました。

ついに早朝3時。アルビルに着きました。ここでも勿論箱を開けてチェックです。アンマンよりも断然楽しそうに調べる係員が印象的でした。ここでは、ちゃんと箱も閉じてもらえました。その後タクシーに乗って、ようやく事務所までたどり着きました。

戻ってから数日後、腕が本当に使えるかどうか試してみよう! ということで、穿刺用の針を購入。水でも大丈夫かなと水を流してトライ! しかし難しい…。

自信満々に1歳の乳児の腕を選択してみました、血管も見えず本当に難しい。結局、水は断念して模擬血液を流すことに。すると、うっすら血管が見えて、血管確保に成功しました。今までにない達成感!

実は、私は日本では乳児に点滴をしたことがありません。幼児は経験がありますが、乳児の点滴は、日本では主にお医者さんが行います。ですから、乳児の血管確保となると、アルビルの看護師さんの方が上手だと思います。中でも、病棟師長さんがやけに上手いのです。そこで、彼女なら失敗せずいけるのでは? と思い、病棟に持って行き実践してもらいました。

やはり上手かったです。2回目で成功しました。今後、彼女を先生に、外来のナースたちの指導をしていく予定です。

さて、ナナカリー病院はというと多少の変化がみられています。

壁中にミッキーマウスをはじめとするキャラクターの大きいシールが貼られていたり、患者さんのベッドサイドに名前や治療内容を書いたホワイトボードが設置されたり、更には看護師長さんが「患者さんたちに毎日きれいにしてって言っているのにしてくれない!」と愚痴をこぼしていたり…。去年の11月には、まさかこんな愚痴が聞けるとは思ってもみませんでした。



ノルジャンちゃん(1歳 白血病)

処置台も毎朝拭かれていてきれいだし、点滴を並べてある棚は埃まみれだったのに埃がなくなっています。小さいですが、嬉しい変化です。

また、看護師さんたちのプライドや知識が知らない間に向上してきたようで、「こんなの輸液ポンプ(点滴を落とす量を調整する機械)がなきゃできないわ」とお医者さんと話していたりします。

お医者さんも「それ用の輸液セット(点滴に使う管)がないと無理よねー」と言っていたり…。

こういうコミュニケーションがはかれていることが素晴らしい。必要なものを自分たちで見出していけることも看護力。今後は、師長さんの愚痴を反映して、一緒に患者さんたちのベッドサイドを清潔に保つ方法や、リネンについて考えていかなければいけません。アイデアはあってもそれをそのまま提供せず、一緒に考えることをしなければ意味がないと私は思っています。自分たちでアイデアを出して決めたことは長続きするはずですし、考えて、自分の意見を持つことに意味があるのです。



再会したアーシアちゃん

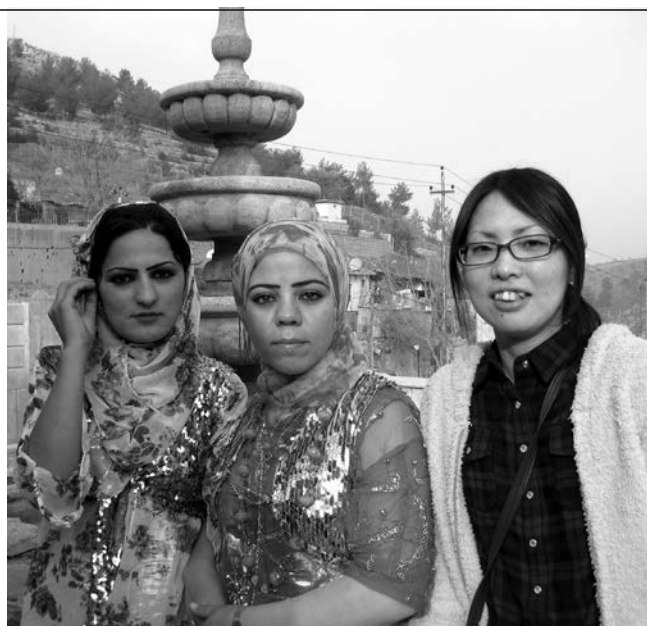
そして、患者さんたちですが、頑張っています。

昨年11月から仲良くしているこどもたちにもたくさん外来で再会できました。現在はまた以前とは違う患者さんたちが入院して病氣と闘っています。

新たに3~7歳の男の子、1~11歳までの女の子と仲良くなりました。

やはり主に白血病、リンパ腫の患者さんが多いのですが、ユーイング肉腫と闘っている少女がひとりいます。

5か月前にイランで足の手術をしたんだと教えてくれました。彼女は11歳ですので、足に大きな傷の残る手術はとても辛い体験だったでしょう。それでも彼女はとても明るく優しい女の子で、必死で私のつたないクルド語を聞きとってくれて、ゆっくり答えてくれた



派手な衣装のクルド女性と筆者

ります。

治療も、化学療法2クール目が始まったばかりなので、もう少し同じ時間を過ごせるかと思います。どうか会話をし、信頼関係を築けたらいいなと思います。

また、病院の女性スタッフ25人くらいとピクニックにも行きました。

皆さんがクルドの伝統的な煌びやかな服を着られていて、一瞬誰が誰だかわかりませんでした。クルドの服は本当に美しい。例えば、全面スパンコールのベストにキラキラした石やスパンコールが散りばめられたシフォンのような素材のロングドレスに、インナーはサテン地の同色のパンツにカットソー。日本の花嫁よりキラキラなのではないでしょうか。

そんな彼女たちとバスで行ったのですが、人数が多すぎて座れない人続出。すると「踊ってればいいよ」とバスの通路に一人で皆が踊りだしました。半ば無理やりにその列にはめ込まれましたが、バスですから、揺れて怖い。クルドの女は強いと思いました。

そうして着いたところは川もあり、滝もあり本当に素晴らしい景色のところで、そこで皆が作ってくれたドルマなどを食べて帰ってきました。

こちらに戻ってからは、また看護師さんや患者さんとの関係作りから始めようと思っています。帰ってきて、急にあれこれしてくださいでは、信頼関係も何もあったものではないですから。

ピクニックのような病院行事に参加したりすることで、病院の看護師だという認識を持ってもらえたかなと思います。実際にピクニック後は、声をかけてくれる病院職員が急増しました。

この1年で看護師さんや患者さん皆と楽しみも、悲しみも共有できるようになればと思います。

イラク戦争の検証を求めるネットワーク

ブリクス氏(元国連監視検証査察委員会委員長)とワセック氏(ファルージャ市民)を迎えて

昨年11月に立ち上げられた「イラク戦争の検証を求めるネットワーク」。イラク戦争支持や自衛隊の派遣、そして復興支援のあり方といったことの検証を日本政府として行うよう求める活動は、この4月、一つの山場を迎えた。海外からの特別ゲストを招き、国會議員達の前で証言してもらったのである。一人は、国連監視検証査察委員会の元委員長で、イラク開戦前の大量破壊兵器査察を率いたハンス・ブリクス氏。もう一人は、米軍による集団的な民間人の虐殺の中でも、特に悪質だったとされるイラク西部ファルージャでの虐殺の証言者ワセック・ジャシム氏だ。戦争の大義がいかに歪められたものだったのか、その結果として、どのような被害があったのか。これらのテーマを語ってもらうには、最適のゲストだった。

当ネットは4月21日、参議院会館でブリクス氏を招いての院内集会を開催し、国會議員や一般市民の約100名が参加した。集会でブリクス氏は「私を含め90%の国際法の専門家はイラク戦争は国際法に違反していると、判断するだろう」と指摘。国連憲章で認められる自衛のための戦争でも、安保理決議による戦争でもない、と喝破した。開戦前に米英両国が、イラクのサダム・フセイン政権の脅威を過剰に煽っていたことについても、

「イラクは国際社会に差し迫った脅威では全くなかった。脅威が増大しているとも言えなかった」

「10年間の経済制裁の中でイラクは破壊されていた。それは国際社会も知っていたはずだ」

「1997年まで、IAEAの事務局長している時にイラクには核兵器もなく、それを作る能力を持っていなかった」と語った。

開戦の口実として、イラクが査察に協力しなかったとの主張に対しても

「イラクは査察を喜んで受け入れた訳ではないが、全く妨害しなかった。我々は2002年から2003年まで700回、500箇所を査察できた」とブリクス氏は断言。そして、米国がイラクで大量破壊兵器を持っているとしてあげた『証拠』は「とてもお粗末なものだった」と批判した。「米国が『証拠』として提出した、ニジェールからイラクがウランを輸入したという書類も偽造だった。IAEAはこの書類が偽造だというものに気がつくまで、1日もかからなかった。この偽造とわかっている書類をブッシュ氏は一般教書演説で、あたかも証拠であるかのように取り上げた。

「私は米国とイギリスにこう言った。『あなた方はイラクに大量破壊兵器があると確信しているようだが、それはどこにあるのか。もし教えてくれれば、そこに査察に行きましょう』と。彼らは100箇所くらいを教えてくれ、私達は30箇所を査察したが、全部査察する前に戦争が始まってしまった。この30箇所でも通常兵

イラク戦争の検証を求めるネットワーク事務局長：

しば れい

志葉 玲(フリーランスジャーナリスト) 写真も



ブリクス氏 (4月21日 参議院議員会館で)

器や書類は発見したものの大量破壊兵器はなかった。つまり、この時点で自分達の持っている情報ソースがいかに酷い、信頼できないものであることに、米英両国は気づくべきだった。」(ブリクス氏)。ブリクス氏は「イラク戦争は回避できた戦争だった」と強調、この失敗から学ぶべきで、「だからこそイラク戦争の検証は重要だ」と語った。「もし日本での検証で必要とされるなら、証言したい」との意向も示してくれるなど、非常に有意義な会合となった。

ワセック・ジャシム氏は4月16日に来日、29日まで名古屋、広島、東京、大阪、沖縄と各地をまわる報告会ツアーを行った。20日には、議員会館で民主・社民の有志の議員たちと面談、彼が撮影したファルージャ虐殺の映像や最近急増している新生児の先天性異常についての写真をブリーフィングした。22日には、JIM-NET主催、イラク戦争の検証を求めるネットワークの協力で、ファルージャからのゲスト、ワセック・ジャシム氏の一般向けの報告会がカタログハウスのセミナールームで行われた。24日には沖縄NGOセンターで報告会、25日は米軍基地の県外・国外の移設を求める県民大会にワセック氏は参加した。ファルージャ攻撃の中心部隊だったのは、沖縄に拠点を置く海兵隊であっただけに、ワセック氏を沖縄に連れて行く意味は大きかった。

ファルージャでは、2004年の4月に700人以上、2回目の11月に6000人もの住民が殺され、行方不明者も、

3000人に及んだとされている。特に11月の攻撃は凄まじく、文字通り「息をしている者は全て撃て」というのが米軍の姿勢だった。

ワセック氏やその家族は、攻撃直前に辛くもファルージャを脱出したが、攻撃の際、14歳以上の男子は「戦闘可能年齢」だとして市外への避難が許されなかったため、「実際には人口約30万人の内のおよそ半数が市内に取り残されていた」（ワセック氏）。当時、ワセック氏はファルージャ近郊の村サグラウィーヤで避難民の支援を行っていたが、同村も米軍は包囲し、支援物資を乗せた車が入れなかったり、米軍ヘリに空爆されたりと散々だったという。攻撃直後、英語が堪能なワセック氏は遺体の回収・引渡しなど米軍の手伝いをさせられ、ファルージャ市内に入った。そこで回収した77体の遺体は、「激しく焼かれたりしていたために、身元の確認ができたのはわずか数体だった」という。

苦悶の表情を浮かべたまま、焼け焦げた遺体、夥しいウジが群がり野犬に食い荒らされ骨が剥き出しになった遺体、戦意が無いことを示す白旗を握り締めたまま撃ち殺された少年…。ワセック氏が撮った映像は本当に凄惨なものだった。遺体の中には、肉体は完全に焼き尽くされているのに、服は無傷という不可思議なものも多くあった。白リン弾は人体の水分に反応して肉体を焼くためか。「わからないのは、皮膚が青白く溶けているもの。他の遺体には腐敗しウジが沸いているのに、この遺体には虫一匹ついていなかった。どうも、得体の知れない兵器が使われたようです」（ワセック氏）。遺体の引渡しはイード、つまりイスラム教徒にとって一年の中で最も重要な祭日。その神聖な日は、米軍からの「プレゼント」で最悪の日となった…とワセック氏は言う。彼はその後一ヶ月間はまともに食べることも寝ることもできなかった。「何千回も体を洗ったが、記憶に臭いが染み付いていました。報



JIM-NET主催の報告会で現状報告をするワセック氏(4月22日)

告のためとは言え、今も、この映像を観るのは、とても辛い」（ワセック氏）。

最も大規模な攻撃は2004年に行われたが、その後も米軍による空爆や人権侵害は続く。ワセック氏自身も米軍に拘束され虐待を受けるという経験をしている。

「あれは、2005年6月のことでした。当時、学生だった弟が大学からの帰宅途中に米軍の検問所で拘束されてしまいました。それで、『弟は無実だ。解放してくれ』と言いに行ったところ、私まで拘束されてしまったのです」。両手を縛られ、頭に袋を被せられたワセック氏は、ワイヤーでのムチ打ち、椅子を投げつけられたりとの暴行を米兵から受け、ある米兵は「俺は家に帰る～、お前は監獄行き～」と歌いながら、石を投げつけたという。翌日、ワセック氏は、釈放されたものの、弟はアブグレイブ刑務所に送られ、2年と7か月拘束されたのだった。結局、容疑は間違いだったのだが、釈放される時、「拷問はなかった」「米軍を訴えない」という署名に強制的にサインさせられた。を訴えない」という署名に強制的にサインさせられた。さらに2006年11月、今度は兄が逮捕された。「夜間、



米軍が突入、家具やパソコンを滅茶苦茶に壊していった。米兵は『2時間ほど、尋問する』と言ったが兄が帰ってきたのは8ヶ月後。名前が指名手配中の武装勢力メンバーに似ているから誤解されたでした。それで米軍は何を言ったかということ、『悪い、悪い、勘違いだった』でした」（ワセック氏）。

ワセック氏の報告でとりわけショッキングだったのは、ここ2、3年前からの異変だ。ファルージャで生まれる新生児に先天性異常が多発しているのだそう。ファルージャの病院から提供された写真で

は、口蓋裂、両足がくっついている、背中に以上に大きな瘤、目や鼻の穴が一つしかない、足が捻じれている、無脳症などといった症状が確認できた。これらの症状はファルージャ総攻撃の前には、ほとんど無かったという。驚くことに、ファルージャで生まれる新生児の20%が重い障害のために生後7日間の内に亡くなってしまふのだ。何故こんな状況となってしまったのか。英ガーディアン紙は、ファルージャは高濃度のダイオキシンや放射能に汚染されていると報じ、イラク環境省も、全国500箇所の中で特に汚染のひどい42地域に新たにファルージャとラマディを追加した。やはり、劣化ウラン弾や白リン弾など米軍が使用した兵器が関係しているのかもしれない、詳細かつ国際的な調査が必要だろう。

今回のブリクス、ワセック両氏による議員や市民への働きかけとしては、大きな成果があったのではないかと思う。今年4月には、イラク戦争支持や自衛隊の派遣、そして復興支援のあり方といったことの検証を日本政府として行うよう求める議員署名は100筆に及び、同月9日、署名は鳩山首相に直接手渡された。署名を持っていった斉藤つよし衆議院議員、今野東参議院議員に対し鳩山首相は「重要な課題」と語ったという。参院選に向け、我々としてはさらに議員達へ「有

~~~~~

## JIM-NET参加団体のご紹介 No.2 劣化ウラン廃絶キャンペーン(CADU-JP)

### ウラン兵器の廃絶へ向けて

### 劣化ウラン廃絶キャンペーン: 生田 隼<sup>いくた まんじ</sup>

イラクの癌や白血病の子供たちの現状に想いを寄せていただいている方には、劣化ウラン兵器の名前は一度ならずお耳に届いているかもしれません。

私たちはそのためのきちんとした疫学調査も必要だと考えているのですが、これほど多くの子供たち(いや大人も)がかつて無い比率で癌や白血病に冒されていく原因のひとつは、間違いなく劣化ウラン兵器の使用だとは考えています。

劣化ウランは、ウランの濃縮過程での廃棄物や原発の燃えカスであるウラン238という、微量の放射能を含む重金属ですが、兵器に転用されるとものすごい破壊力を発揮するので、NATO軍、その中核を成すアメリカ軍、イスラエル軍などが保持し、実戦にも使われてきました。この兵器の恐ろしい点は、その破壊力だけにあるわけではありません。たとえ「微量」であっても、ウラン238の原子が体内に取り込まれると、半永久的にアルファ線を出し続け、周りの細胞や血液を癌化してしまうのです。また、半減期が45億年と途方も無く長く、文字通り永久に土壌や地下水を汚染し続けることになります。

確かに劣化ウラン兵器は核爆発を伴うわけではないので、核兵器とは呼べないかもしれませんが、核物質がもっている毒性を撒き散らしている点で、人類と共存することのできない。いや、すべきでない兵器であると我々は考えています。

権者」として働きかけていく予定だ。本稿を読まれている方々にも、是非、ご支援・ご協力いただければ幸いである。

### ハンス・ブリクス氏略歴

1963年スウェーデン外務省入省。外務次官、外相などを歴任後、ジュネーブ軍縮会議スウェーデン代表として20年にわたり参加。

1981～1997年、国際原子力機関(IAEA)事務局長。2000年3月に国連監視検証査察委員会(UNMOVIC)委員長に就任、2003年6月に退任。2004年1月より、独立機関である「大量破壊兵器に関する国際委員会」(WMDC)委員長。

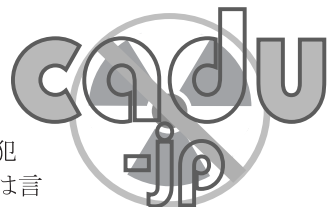
### ワセック・ジャシム氏略歴

1979年9月14日生まれ。アンバール大学教育学部英語学科卒業。2004年11月、2度目のファルージャ総攻撃直後、米軍が避難民に遺体返還した際のようにすを撮影し、国際社会に大きなインパクトを与えた。また、「イラク再建青年グループ」のスタッフとして人道支援活動にも尽力。現在は、ファルージャで中学校英語教師とコンピュータスクールの講師を務める。

残念ながら、劣化ウラン兵器に関する報道も一時と比べて下火になり、この兵器の危険性、犯罪性が周知されているとは言いがたい状況です。

私たちは微力ながら、学習会や映画の上映などを通じて、この兵器を非人道的な兵器として禁止するキャンペーンを行っています。2006年、広島では、劣化ウラン兵器禁止のための国際会議が開かれ、ICBUW(ウラン兵器の禁止を求める国際連合)を中心に、この運動を国際的に広げてゆこうとする取り組みもなされています。地雷やクラスター爆弾が人々の地道な努力によって国連での禁止決議を勝ち得た先例に習い、努力を続けたいと思っています。

また、劣化ウランは、私たちの日々の電気使用から生み出されています。原発を止め、劣化ウランの供給自体も止めていかねばならないと思います。65年前、私たちは広島・長崎の被爆者に対し、二度と過ちは繰り返さないと誓ったはずでした。が、現実には兵器としての核による犠牲者が生まれ続けています。とくに子供たちが病気になり亡くなってゆくのはあまりにも理不尽です。小さな団体ですが、どうか、皆様の力を借りて、劣化ウラン兵器の廃絶へ努力を続けて行きたいと思っています。





『余命一日まで』 篠田 久男 文芸社 定価1100円



この度、JIM-NETサポーターの篠田久雄さんが、ご自身の半生記を綴った『余命一日まで』を出版されました。

背表紙にチョコ募金のサブリーンの絵をあしらったこの本で、篠田さんはJIM-NETの紹介をし、売上の一部をJIM-NETに寄付して下さることになりました。篠田さんには、JIM-NET便りの紙面からあらためて感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

この本は、篠田さんの波乱に満ちた半生をつづったものです。父親のDV(家庭内暴力)から逃げ、家を転々とした幼少時代。家庭の経済事情から高校へ行けずに働きに出る青年時代。19歳で家出。20歳で美容師になり、結婚し、仕事もプライベートも充実した生活を送りますが、生まれた息子さんに重度の障害があることがわかります。それでも奥さんと二人で明るく、たくましく息子さんを育て、自分の店を3店も立ち上げ、出張ブライダルヘアメイクなど精力的に仕事を行う篠田さん。

そんな篠田さんに、53歳の時に悪性リンパ腫が見つかります。一度は店に戻りますが、マスクをして陰しい顔をした自分の姿は、自分の理想である『夢と満足を与える美容師』にはほど遠い…と店をたたむ決心をします。それでも篠田さんは尿管ステントの交換にも負けず、人生をさらに謳歌しているところです。施設などでボランティアの美容師を続け、今年から福祉美容師の資格を取るために学校に通い始めたそうです。55歳の1年生! すごいですよね!!

余命一日まで。最期の日まで。全力で生きていく、勝ち続けていくことを誓った篠田さんからパワーをもらえる本です。

篠田さんから、収益を活動の役に立ててほしいと『余命一日まで』を30冊寄贈していただきました。購入ご希望の方は、事務局(☎03-6228-0746)までご連絡ください。収益はすべて支援に使われます。

(定価1100円+送料160円)

## チョコ募金

### 限りなき義理の愛大作戦2010会計報告

前号でもお知らせいたしましたとおり、今回のチョコ募金キャンペーンでは多くの皆さまのあたたかいご協力をいただきました。皆さまのお志を医療支援としてイラクの子どもたちに届けることができますこと、スタッフ一同心より感謝申し上げますとともに、これからも変わりないご支援をくださいますようお願い申し上げます。

4月30日時点での募金の収支を、以下のとおりご報告いたします。

2010年度チョコ募金 (2010年4月30日)

募金収入: 49,955,108円

募金経費: 13,262,998円

募金純益: 36,692,110円

※ 募金純益は、収入から経費を差し引いたもの。



今号から高橋マリモさんの連載開始!

「地球大学」のナビゲーターとして世界を巡るピースボートに乗り込んだ我が局長…

## 局長くん 高橋マリモ



編集後記

ページ数は同じ(8ページ)ですが、今号よりJIM-NET便りが、以前のA5サイズからB5サイズへと、面積でいうと従来の5割ほど大きくなりました。

もっとたくさん情報をお届けしたい、写真を大きくしたい、四コマ漫画を掲載したいといったさまざまな願いをかなえるための紙面刷新。みな様にはどのように映っているでしょうか? みな様のご感想をお待ちしております。

JIM-NET便り 2010年春号

発行: 日本イラク医療支援ネットワーク

発行日: 2010年6月15日

〒171-0033

東京都豊島区高田3-10-24 第二大島ビル303

info-jim@jim-net.net ☎ 03-6228-0746